古墳時代の日朝交流と金工品

土屋隆史

序章　本研究の目的と課題

研究目的

本稿では、古墳時代における倭の対外交流の中でも大きな比重を占めていたと考えられる倭と朝鮮半島南部諸勢力との交流の様相を、金工品の分析を通して考察することを目的とする。

研究対象

金工品は、金属に細工が施された工芸品の一種であり、冠・帯金具・飾履といった金銅製装身具や、装飾付大刀･胡籙金具といった武具、装飾馬具などが挙げられる。これらは、古墳時代に大陸から朝鮮半島を経由して日本列島に伝播してきた。金工品の製作には金や銀などの稀少な素材、高度な技術が必要とされることから、この時期の金工品は基本的に王権などの有力集団の管理下におかれて製作されていたということが予想される。そのため金工品授受の背景には有力集団からの政治性も反映されると考えられる。古墳時代における日本列島と朝鮮半島の政治的交流に迫りうる資料である。

倭で出土する金工品の故地は時期によって異なるが、百済、新羅、大加耶からの影響が顕著であることから、これらの地域の金工品の動向をさぐる必要がある。本稿では、これらの地域にみられる金工品の中でも胡籙金具、飾履、冠に注目した。胡籙金具は矢を入れる器の一種である胡籙を飾る金具であり、飾履・冠はそれぞれ足と頭を飾る金具である。それぞれ用途は異なると予想されるが、全て朝鮮半島を経由して日本列島に伝播した金工品の一種であるということには変わりなく、製作に必要となる素材や技術は共通する部分が多い。ここでは一端、それぞれ想定される用途は棄却し、純粋に金工品の一種として取り扱うことで、装身具、武具、馬具といった多様な金工品を比較検討しながら金工品としての社会的機能に注目した。

分析方法

金工品の調査を通して得た製作技術や各属性の情報を、以下のようにして分析する。

・金工品の中でも時間性を反映する属性に注目することで、編年を作成する。

・各地域での金工品の展開様相を編年の段階ごとに整理し、その中で地域性を反映する属性に注目しながら、それぞれの金工品の製作地について探る。

・金工品の分布状況や出土古墳の階層性を検討することで、各地域による金工品授受の特徴を探る。

・上記の朝鮮半島における金工品の状況を、日本列島における金工品の受容様相とあわせて検討することで、朝鮮半島側の視点から日朝交流の狙いを探る。

・渡来工人の関与のもと、倭で製作されるようになる金工品が、倭王権によってどのよ

うに利用されていたかを検討することで、日本列島側の視点から日朝交流の狙いを探る。

第Ⅰ部　朝鮮半島における胡籙金具の展開

第１章　胡籙金具の分類と編年

まず、朝鮮半島南部と日本列島で出土している胡籙金具を集成したうえで、胡籙金具の各部位に装着される吊手金具・収納部金具・勾玉状金具・帯金具を、属性のまとまりをもとに、いくつかの形式に分類した。さらに、吊手金具・収納部金具・勾玉状金具・帯金具の形式の組み合わせを検討することで、胡籙金具を構成する各部位の金具のまとまりとしての胡籙金具群を設定した。そして、吊手金具と収納部金具の属性相関を根拠に胡籙金具群の変化の方向性を見極めたうえで、朝鮮半島南部と日本列島のそれぞれで共伴遺物の編年的位置づけをもとに想定した変化の妥当性を検証した。こうして得られた情報をもとに、それぞれの胡籙金具群の併行関係を定め、胡籙金具の変遷過程を３つの段階をもって把握した。このような分析によって、朝鮮半島南部と日本列島の資料を包括した胡籙金具の編年を作成した。

第２章　胡籙金具の分布状況と地域性

本章では、朝鮮半島南部における胡籙金具の分布状況を検討し、その地域性を政治領域と関連付けて解釈した。その結果、百済、新羅、大加耶、阿羅伽耶でそれぞれ地域性がみられることを確認した。

第３章　百済における胡籙金具の展開

百済ではⅠ段階（４世紀末～５世紀前葉）から独自の胡籙金具の製作が開始された。おそらく高句麗の影響を受けて出現したものと考えられる。この時期から、金銅装を頂点とした素材の違いに基づく格差付けの傾向がみられた。また、Ⅱ段階（５世紀中葉～後葉）になると、拠点となる地方各地に向けて胡籙金具がもたらされるようになった。これは、冠帽や飾履の授受に通じる百済の社会統合のための一手段として機能していたと考えられる。Ⅲ段階（５世紀末～６世紀前葉）にも胡籙金具はみられるが出土数は少なくなり、泗沘期には胡籙金具はみられなくなった。

第４章　新羅における胡籙金具の展開

新羅ではⅠ段階（４世紀後葉～５世紀前葉）から独自の胡籙金具の製作が開始された。百済と同様に、高句麗の影響を受けて出現したものと考えられる。Ⅰ段階の双方中円形Ⅰａ群は釜山、倭などにももたらされており、分布域が広い。龍文透彫帯金具も同様であり、新羅世界を示すため、広い地域にもたらされていたようである。Ⅱ段階（５世紀中葉～後葉）になると、金銅装からなる双方中円形Ⅰａ群・双方中円形Ⅱａ群と、銀装・鉄装からなる短冊形ＡⅡ群・方形ＡⅡ群の間に、金銅装を上位とする格差付けの区分が生まれた。

これも、帯金具や冠を始めとした他の金工品にみられた素材による格差付けと同様の原理であった。Ⅲ段階（５世紀末～６世紀中葉）になると、玉虫装飾やガラス玉装飾、金象嵌のような装飾性の高い胡籙金具がみられるようになる。これらは、金銅装に加えた新しい格差付けの原理であろう。装飾馬具からも、この時期にガラス材などの特殊な素材を用いた序列化が生まれたことが指摘されている。

第５章　大加耶における胡籙金具の展開

大加耶ではⅡ段階（５世紀中葉～後葉）から胡籙金具が多く出土するようになる。古相の玉田Ｍ１号墳の時期には、新羅と百済からもたらされたものが多く確認できたが、新相の玉田Ｍ３号墳の時期には新羅・百済工人の関与のもと、大加耶で製作される胡籙金具が多くなった。Ⅲ段階（５世紀末～６世紀中葉）になると、百済と大加耶の工人による相互の技術交流の中で製作された胡籙金具も現れ、製作における大加耶の主体性が徐々に強くなっていった。

また、新羅に系譜が辿れる胡籙金具は高霊・陜川に加えて、阿羅伽耶、倭といった外部の地域に多くもたらされていた。一方、百済に系譜が辿れる胡籙金具は阿羅伽耶、倭にはほとんど分布せず、百済と大加耶の領域境付近にあたる拠点となる地域へもたらされていた。新羅と百済に系譜が辿れる胡籙金具には、それぞれ別の社会的機能が与えられていたと考えられる。

第６章　阿羅伽耶における胡籙金具の展開

阿羅伽耶の胡籙金具の多くは大加耶からもたらされた双方中円形Ⅱａ群であったが、一部に大加耶の双方中円形Ⅱａ群を模倣しようとして生まれた阿羅伽耶独自の特徴をもつ胡籙金具もみられた。わずかではあるが、阿羅伽耶でも胡籙金具が製作されていたようである。

第Ⅱ部　日本列島における胡籙金具の展開

第７章　倭における胡籙金具の受容

本章では、まず倭における胡籙金具の系譜を時期ごとに整理した。その結果、Ⅰ段階（５世紀前葉）では新羅・百済、Ⅱ段階（５世紀中葉～後葉）では新羅・百済に加えて大加耶、Ⅲ段階（５世紀末～６世紀中葉）では大加耶に系譜が辿れる胡籙金具がみられることがわかった。次に、倭における胡籙金具の分布状況を検討した。Ⅰ・Ⅱ段階では畿内地域にはあまりみられず、瀬戸内地域・北部九州地域を始めとした海沿いの地域に多く分布するが、Ⅲ段階になると畿内地域に集中するようになり、倭における分布域や出土数も拡大した。Ⅲ段階は、倭王権が胡籙金具を受容し始めた時期であったと考えられる。

最後に各時期における胡籙金具の系譜に注目し、朝鮮半島南部における胡籙金具の授受の特徴を考慮しながら、日朝交流の様相を考察した。Ⅰ段階には、主に新羅から倭へ胡籙

金具がもたらされた。新羅側の窓口は釜山の有力集団であり、倭側の受け手は地方の有力首長であったようである。新羅における双方中円形Ⅰa群の授受の特徴を考慮すると、新羅は倭の地方の有力首長とも積極的に交流関係をもつことで、新羅世界を広く示そうとしていたと考えられる。

Ⅱ段階には、主に大加耶から双方中円形Ⅱa群がもたらされた。倭の受け手は地方の有力首長であったようである。大加耶における双方中円形Ⅱa群の授受の特徴を考慮すると、大加耶は倭の地方の有力首長とも積極的に交流関係をもつことで、倭との政治的紐帯を形成しようとしていたと考えられる。

Ⅲ段階には、倭で大加耶に系譜が辿れる胡籙金具が多くみられるようになる。この時期の大加耶では胡籙金具の副葬は低調であり、倭でみられる胡籙金具は大加耶の思惑でもたらされたものではない。大加耶から渡来してきた金工技術をもつ渡来人が倭王権によって編成され、倭国内で製作されたものであった。渡来人の招聘は、主に倭王権側の働きかけによるものであったと考えられるだろう。

第８章　倭における胡籙（やなぐい）の出現過程

本章では、胡籙金具にわずかに残る有機質に注目し、劣化によって本来の姿がよくわからない胡籙自体の構造について検討した。とくにⅢ段階（５世紀末～６世紀中葉）に多くみられる胡籙構造（Ⅲ群）について、先行研究の論点を整理したうえで、残存状態の良好な事例をもとにしながら形態復元案を示した。そして、これがⅠ段階（５世紀前葉）に倭で出現した胡籙構造（Ⅰ群）に系譜が辿れるものであり、Ⅱ群、Ⅲ群へ変化を遂げて、やがて正倉院宝物中にみられる奈良時代の「胡籙（やなぐい）」へと繋がったことを示した。

第９章　倭における平胡籙の出現過程

本章では、復元形に諸説あった古墳時代の盛矢具の金具が、正倉院宝物にみられる奈良時代の「平胡籙」の祖形となる胡籙に装着された金具である可能性が高いことを示した。金具からみる限り、平胡籙の祖形はＭＴ１５型式期頃には出現していたようであり、とくに畿内地域に多く分布している。平胡籙金具は新羅が故地である可能性があるが、日本列島では倭王権が中心となって、倭国内で製作されていたようである。

このように第８、９章では、胡籙という日朝交流の結果伝わった文物が日本列島に定着する過程を示した。胡籙（やなぐい）、平胡籙ともに５世紀末～６世紀初頭頃に倭王権によって受容されたことが、その後の定着の画期になったようである。

第Ⅲ部　倭王権と金工品

第 10 章　倭における金銅製飾履の受容と展開

本章では、金銅製飾履の底板と側板の接合方法・結合技法に地域性と時間的変化がみられることを明らかにし、この視点に注目しながら、百済、新羅、倭の飾履の展開過程を整

理した。倭ではＴＫ４７～ＭＴ１５型式期に、Ⅱ群Ｃ型という形態が出現した。透彫文様やガラス玉の接合は百済に由来するものではあるものの、そこには倭独自の特徴がみられ、また底板と側板の接合方法・結合技法は倭でのみみられるものであった。これは百済工人関与のもと、倭で製作されたものであったと考える。そしてＴＫ１０古段階型式期以後にみられたⅡ群Ａ型の飾履は、底板と側板の接合方法は百済の飾履と共通するが、底板と側板の結合技法の違いや文様の崩れがみられた。これもやはり百済工人の関与のもと、倭で製作されていたと考えられる。このように、飾履は倭で出現してまもなくして受容され、倭国内で製作が開始されたようである。

第 11 章　倭における広帯二山式冠の出現過程

本章では、ＴＫ４７型式期以後に倭の古墳副葬品となる広帯二山式冠の出現過程について論じた。広帯二山式冠の原型の候補となる朝鮮半島の冠と比較し、また蝶形金具、ガラス玉接合技法、文様の変化に注目することで、広帯二山式冠の出現過程を示した。その結果、広帯二山式冠は百済の冠帽・飾履の文様と加耶の冠の立飾を変形し、倭在来の織物製冠の形状を模倣して、倭において生み出された倭独自の冠であったことがわかった。百済と加耶の要素がみられることから、百済工人と加耶工人が製作に関与していたようであり、また倭在来の織物製冠を知る倭工人も一定数製作に関与していたと考えられる。

終章　古墳時代の日朝交流と金工品

倭における金工品受容の画期となったＴＫ４７型式期以後における日朝交流の様相を考察した。この時期、胡籙金具には大加耶工人、飾履には百済工人、そして広帯二山式冠には百済工人と加耶工人が関与し、これらは倭国内で製作されていた。これらの変化が倭国内で共通すること、そして分布が畿内地域に集中することから、倭王権が渡来人を編成して製作の主体になったと考えられる。こうして、定型性の高い金工品が倭で創出されたのである。

また、広帯二山式冠と胡籙金具には出現期であるＴＫ４７型式期から複数の系列がみられるが、これらは系列に応じて格差付けがなされていたわけではない。また、畿内地域における分布状況からは、淀川流域に特徴的な系列が分布する様相がみられた。すなわち、広帯二山式冠と胡籙金具には、首長を上下に格差付ける機能の他に、系列の違いに応じて所属集団のような地域に由来する違いを示す機能が加わったと考えられる。ＴＫ４７型式期以後、倭王権はこのような新しい身分秩序のかたちを求めて、百済、大加耶をはじめとした朝鮮半島南部勢力との交流に、積極的に乗り出していったと考えられる。

やがて、ＴＫ４３型式期に倭国内における装飾付大刀の本格的な製作が開始されるなど、金工品を用いた身分秩序は形を変えて継続されていき、やがて冠位 12 階制の中で服飾制度として整えられる。金工品、そして日朝交流は古墳時代における身分秩序形成のうえで重要な役割を果たしていたのである。